

Title	文献探訪 Book Review : マイケル・サンデル(Michael J. SANDEL)著 : 小林正弥・杉田晶子訳 : 「ハーバード白熱教室講義録+東大特別授業」 上下 : 早川書房、2010年
Author	西垣, 順子
Citation	大阪市立大学大学教育. 8巻2号, p.83-85.
Issue Date	2011-02
ISSN	1349-2152
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学教育研究センター
Description	
DOI	10.24544/ocu.20171218-175

Placed on: Osaka City University

≡ 文献探訪 Book Review ≡

西垣順子 (大学教育研究センター)

マイケル・サンデル (Michael J. SANDEL) 著

小林正弥・杉田晶子訳

「ハーバード白熱教室講義録+東大特別授業」上下
早川書房、2010年

日本でもベストセラーになった「これから『正義』の話をしよう—今を生き延びるための政治哲学」(早川書房、2010年、鬼澤忍訳)の著者で、政治哲学者であるサンデル教授(ハーバード大学)の講義録が出版された。この講義録には、ハーバード大学でサンデル教授が実施した講義と、2010年8月の来日時に東京大学で行われた講義の記録が収録されている。これらの講義は「ハーバード白熱教室」として2010年4月から12回にわたってNHKで放映されもしているので、ご存知の方も多いのではないかと思う。

本書には第1回から第12回までの講義(1回の講義は2つのレクチャーにわけられる)が収録されており、レクチャーごとに訳者でもある小林正弥教授(千葉大学)による解説がついている。解説を読むことで、各レクチャーの内容がサンデル教授の政治哲学思想の中にどのように位置づくのか、さらにはサンデル教授の政治哲学界での立ち位置や思想的背景をつかむことが出来るようになっていく。

本書によるとサンデル教授の授業はハーバード大学で大変人気があり、毎年1000人を超す学生が詰めかけるとのことである。実際のところ日本でも、2010年現在でブームになっていると言ってもよい状況にあるだろう。小林教授の解説(下巻、p.46)によると、サンデル教授の講義の中で主要な思想の提唱者の1人として登場するロールズ(John Rawls, 1921-2002)が「正義論」を提唱するまでの間、政治学においては実証主義、経験主義の流れが強力になってきていて、政治哲学は「死にかけたも同然」だったとのことである。そしてサンデル教授は、そのロールズの思想を批判することによって思想的に大きなインパクトを与え、世界的に著名になった人物なのである(下巻、p.64)。ロ

ールズとサンデルそれぞれの政治哲学思想の内容を本稿で紹介するのは差し控えるが、昨今は大学教育も含めた教育に関する議論において、実証主義、証拠主義が席卷しているきらいがあり、その状況に無批判に迎合するのでもなく、ただ闇雲に反対を叫ぶのでもない、説得力のある教育論を構築することが必要だと考えている立場からも、サンデル教授による政治哲学の講義展開には興味深いものがあった。

本書やNHKの番組で「白熱教室」と呼ばれている講義は、ハーバード大学における学士課程学生向けの講義で、ハーバード大学のwebサイト(<http://athome.harvard.edu/programs/jmr/index.html>)によると2010年現在の開講タイトルは「Justice: A journey in moral reasoning」という。アメリカ合衆国の大学では学士課程は教養教育中心であるので、サンデル教授のこの授業には日本で言うところの法学部学生に限らず、さまざまな専門分野を学ぶ学生が集まっていると推測できる。

本書は、正義に関する思想を中心に政治哲学について理解するためにも有効な講義録であると思われるが、大学教育全体を考える上でも参考になる視点が含まれている。ひとつは「大学で学ぶとはどういうことか」という観点で、もうひとつは大学での授業方法、特に多人数授業で学生に能動的に学ばせるための教育方法という観点である。

筆者の印象にすぎないが、少なくとも日本における「白熱教室」に対する人気は、サンデル教授による刺激的な発問による授業方法への賛美に偏っているように思われる。だが講義録を読む限り、サンデル教授の意図のより重要な部分は、前者の観点(大学で哲学を学ぶことの意味)にあるのではないかと思われる。

サンデル教授は初回の授業で、この講義では受講生が哲学者の著作を読み、現代社会の諸問題について議論するのだと述べ、この知的で楽しそうに見える授業に参加することの「リスク」について次のように「警告」している。

「哲学という学問は、私たちが私たちがすでに知っていることに直面させて私たちに教え、かつ、動揺させる学問だ(上巻、p.22)」「慣れ親しんだものが見慣

れないものになってしまう、それは二度と同じものにはなりえない。自己認識とは、純真さを失うようなものだ。（中略）これが個人的なリスクだ（上巻、p.22）「政治的リスクは何だろうか？（略）政治哲学は君たちを、善い市民にするよりも悪い市民にする危険性を秘めている。少なくとも、善い市民になる過程で、いったん悪い市民になってしまう可能性がある（上巻、p.23）」（下線は筆者による）

このように警告した上でサンデル教授は、これらの個人的リスクや政治的リスクに直面したときによく使われる言い訳が懐疑主義だと述べ（上巻、p.24）、懐疑主義を次のように批判している。「（問題についての議論を続けることが）なぜ避けられないかと言うと、私たちは毎日、これらの疑問に答えを出しながら生きているからだ。だから懐疑主義に呑みこまれ、諦めてしまい、道徳に関する熟考をやめてしまっは解決にならない（上巻、p.24）」。そして初回の授業を、「この講義の目的は理性の不安を目覚めさせ、それがどこに導いていくのかを見ることだ（上巻、p.25）」と宣言して締めくくっている。

初回授業でのこの警告と宣言は、最終回の授業でも再び言及されている。サンデル教授は政治哲学を学ぶことによる個人的リスクと政治的リスクを繰り返して述べ「君たちが、多少はこの不安を経験してくれていればいいと思う（下巻、p.237）」と、学生たちに語りかけている。

これらの発言は、「政治哲学とは何か」と「政治哲学を学ぶとはどういうことか」についてのサンデル教授の思想を示しており、それは学問分野を超えて大学で学ぶこと全般に当てはまるのではないかと思われる。つまり、大学で学ぶということは、専門知識を積み上げてパワーアップするというのみを意味するのではなく、先入観や既有知識を相対化して動揺させ、少なくとも一時的に学生の認識を混乱させて弱くする側面をも、重要な要素として含んでいる。多少なりとも「不安を経験してくれていれば」というのが、サンデル教授が受講生に望んでいることである。

サンデル教授の講義Justiceは受講生が1000人を超える講義科目である。上述のハーバード大学のwebサイ

トで講義風景を見ることが出来るが、講義室というより演劇ホールのようなものである。このような講義で学生参加型の授業を展開しているサンデル教授の授業技術は、日本の大学とは異なってアシスタントやライブラリアンのサポートが充実している状況を考慮しても、確かに敬服に値する。実際に彼は、ハーバード大学での優秀教育賞にあたる賞を何度か受賞している。

サンデル教授の授業技術の中核は、日本でも有名になった発問である。本書の帯にも「正しい殺人はあるのか？」と授業で使われる発問が大きく掲載されている。これらの発問とそれに続く議論は、学生の「理性の不安を目覚めさせる」ための道具である。哲学者が論じてきた正義論を教授が一方的に論じるのではなく、学生に質問をして答えさせ、その答えと哲学者たちの思想を対話させることによって授業は展開していく。このような発問の作り方とその後の授業の展開の仕方、もう少し具体的に言うと、学生に発言させつつ、授業をしかるべき軌道に乗せて運営していくテクニクは、学問分野を超えて大学の講義方法を考える上で参考になる点が多くみられるのではないかと思われる。

なお、サンデル教授の発問を用いた授業の進め方には、いくつかポイントがあるように思われた。ひとつは、教授は学生に問いかけるが、全員が納得するような答えに議論が収束するわけではないということだ。日本における白熱教室人気がこの点をどのように理解しているのか、筆者にはつかみきれないのだが、例えば「正しい殺人はあるのか」という問いにどう答えるかについて、教室内の学生の意見は平行線であり、結局のところ答えはない。これはサンデル教授の授業の目的が、あくまで慣れ親しんだ考え方を動揺させて理性の不安を目覚めさせることにあるためである。

もうひとつのポイントは、サンデル教授は学生に質問をして、それに対する答えを複数の受講生から多く引き出してはいるが、基本的には教授自身が設計した授業のストーリーに従って話を展開しているということだ。結果的に、学生の発言が無視されている（ように見える）こともある。つまり、学生に意見を言わせて後で、「そうか、どうもありがとう。この問題に対する私の見解はこうだ」と話が続く場面がいくつかあ

る。学生に発言させるのは、学生の意見を取り入れながら授業を進めると言うよりも、学生のアタマを活性化させて授業内容を理解するための心の準備（アタマの準備）をさせるためなのであろうし、それが学生を講義に参加させる有効な方法なのだろう。

ここまで述べてきたように、本書には専門とする学問分野に関わらず、授業のあり方等を考える上で参考にできる事柄がさまざまに含まれていると思われる。願わくばいつの日か、この授業を受けた学生たちが実際には何をどのように感じたのか、どのようなレポートを書き、それがどのように評価されているのかを知らせてもらえればと思っている。なぜなら少なくとも筆者自身には、いろいろと不思議に感じる部分も多くあったからだ。

本稿でも述べてきたように、サンデル教授の授業の目的は「理性の不安を目覚めさせること」である。これは、本来は学生にネガティブな感情反応を引き起こすはずのものだと思われ、サンデル教授の授業が不人気になっても不思議はない。だが実際には大人気であ

る。

実は、本書を読んでみて個人的には強い違和感を感じた部分がある。学生がよく笑うことだ。講義録には「一同笑」という箇所が多くある。これはサンデル教授の授業の人気の高さや素晴らしさを示すものとして理解されていることが多いのだと思うが、筆者自身には学生がなぜそこで笑うのかがわからなかったり、話の展開次第ではそこで笑うことが不気味に思えることすらあった。それは文化や環境が大きく違うだけのことかもしれない。実際には笑っていない学生も多くいるのかもしれない。授業において学生のアタマを、良い意味で緩めて活性化するためには、笑いが起こる状況は有効でもあろう。だから、笑いが起きていることそのものを否定したいのではない。ただ、不思議なのである。

この授業を通じて学生がどのような感情を感じ、それをどう受け止めているのか、そして授業を通じてどのように成長していったのか、いつかそういう視点からもサンデル教授の教育実践を学ぶ機会があればと思う。